

## 見えにくさへの支援④

### ～見えにくさは人それぞれ、活用する支援の方法も人それぞれ～

本校は盲学校という名称のため、全盲である全く目が見えない人だけが通う学校と誤解されることがあります。実際は、弱視と言われるさまざまな見えにくさのある幼児児童生徒も通っています。外を歩くときは白杖（はくじょう）を使う方もいれば、休み時間は友達と鬼ごっこで走り回っている子どもたちの姿を見ることもあります。

学習場面では、点字の教科書を使っている子どもと、通常の文字を拡大した教科書を使っている子どもがいて、一緒に教室で同じ内容を学んでいることもあります。さらに、最近ではタブレットでPDF版拡大図書を使ったり、黒板をiPadで撮影して手元で拡大して見るなど、自分に合った方法で見えにくさを補助して学んでいます。

通常、黒板の文字を読むためには、一番前の席でも（矯正）視力が0.3以上必要となり、黒板の端の方や光の反射具合によっては見えにくさが増すこともあります。そこで、座席を前にするだけでなく、光の反射の影響が少ない位置にしたり、黒板やプリント拡大できる補助機器を活用したりします。



### ある日の出来事

毎朝通勤途上に通る公園での出来事です。いつもすれ違う盲導犬を連れた視覚障害の方がいらっしゃるのですが、ある日、いつもとは違う道路の端の水飲み場のところにいらっしゃいました。連れてくる犬に水でも飲ませているのかなと思いながら通り過ぎると、その方がつぶやいている声が耳に入ってきました。

「ちょっと待ってね。私たち迷子になっちゃったの。白い線が分からなくなっちゃったの。」  
ん？休憩じゃないのかと、通り過ぎるところだったのですが、踵を返して声を掛けました。すると、近くをウォーキングしている年配の男性も同時に気づいたらしく、「こっちだよ。もうちょっと前に進んでごらん。」と声を掛け白線に誘導しました。

おそらくですが、声をかけた男性も、盲導犬を連れていらっしゃる方が普段と違うところにいたので気になったのでしょう。その後、その方は白線を見つけて普段通りに歩いて行かれました。

白杖を持っている方は、街中などで道に迷ってしまったり何か困ったことに遭遇してしまったりした時には、白杖を高く掲げて援助を求めることがあります。私は、その盲導犬を連れた方が、歩道の白線を頼りにされていたことに初めて気づいたことと、盲導犬を連れていらっしゃるから道に迷うことなどないと思い込んでいました。見えにくさに関わらず、ヘルプカードを身につけていらっしゃる方など、周囲のサポートが不意に必要なことは、自分の身にも起こりうることです。仕事柄、今回はちゅうちょなく声かけをできましたが、そのような経験がなかったとしたら、どうやって声を掛けたいんだろうと、戸惑っていたでしょう。日頃から“何かお困りのことありますか。お手伝いしましょうか”と申し出る心構えをしておきたいと思いました。

